

## 玉藻前曦袂

たまものまえあさひのたもと

### 道春館の段

みちはるやかた

思ひ寝の夢の間の、枕に契る明け方や  
琴の調べは初花姫、腰元共に歌はせて、弾く爪音の氣  
高きよ、

右大臣道春公の夏座敷、松吹く風も一入に、いと涼し  
さ増さるらん。

折節一間騒がしく、走り出でたる桂姫、

桂姫「ノウ、采女之助はいづくへぞ。これノウく」

と取り付いて、

桂姫「ヤア、そなたは妹の初花。ハア、恥しや」

と袖覆ひ、胸撫で下ろすばかりなり。

初花姫は不審顔、

初花姫「申し姉上、けたまわしい今のお声、怖い夢でも  
ご覧じたか。お氣もじ悪うはないかえ」

ち。

かゝる折から入り来たる安倍の泰清、几帳のこなたに  
佇みて、

采女「後室様よりお召しによつて、只今参上致したり。

誰そお取り次ぎ」

と言ひ入れる

声に飛び立つ桂姫、

腰元

端女、立ち騒ぎ

腰元「そりやこそ今のがお出でた」

と、さゝめき合へば、

初花姫「ノウ姉様、自らは采女之助の見えた事、お知らせ  
せ申さん。皆こちへ」

と、心利かして立つて行く、まだうら若き初花の、やが  
てその身も恋盛り、

ほのめき盛りの腰元共、引き連れ奥へ入る後に。

入る間待ち兼ね桂姫、

桂姫「逢ひたかつた」

と、介抱すれば

面映ゆげに、

桂姫「そなたの手前も面目ない。先に母様が旅行の恋  
といふ題を賜はりし故、遊まんと思ひしに、何やかや  
心の纏れ、案じ煩らう。几、凭れ掛かりし転た寝  
に、采女之助とたゞ二人、宇治の川辺をそこゝと、  
賤の手業も打ち眺め、苦を敷き寝の楯枕、嬉しい夢  
を見たはいの」

と話し給へば

腰元共、

腰元「どうでそんな事かして、このお汗の出たことはい

の」

と、髷の乱れに櫛入れて、労り申せば

初花姫、

初花姫「この頃はくよくくと、どうやらお顔の色も悪  
い。その様にきなくと思し召し、お失例でも出やう  
かと、案じらるゝ」

と姉思ひ、手を取り交はす姉妹の、仲ぞゆかしき大内育

と走り寄り、縋り給へば

振り放し、

采女「ヤレ、声が高いお姫様。委細は御存じある通り、  
皇子の方より毎度の催促、御入内あらば双方無事に治  
まる波風。もし御得心なき時は、後室様の御身の上。

サ、こゝをよう弁へて、拙者が事は思ひ諦め下され  
よ」

と、言ふ顔

つれづれ打ち守り、

桂姫「エ、そりやあんまりぢや曲がない。今さら言ふも  
恥づかしながら、北野詣での折からに、思ひ初めたが  
身の因果。ほんに寝た間の夢にさへ、焦がれ焦がるゝ  
恋しさに、とても叶はざ思ひ切り、忘りよと思や思ふ  
程、なほ忘れられぬ女子の因果。それに引き替え胸欲  
な、酷いはいの」

とひと筋に、思ひ詰めたる娘氣の、訳もなまめく恨み泣  
き。

折節次の一間には、

萩の方 「花も憂し、嵐も辛し諸共に、散ればぞ誘ふ、誘へばぞ散る」

と、古歌を吟ずる母の声、  
『ハッ』と思ひし姫よりも

采女之助は氣を焦り、

采女 「さては様子を御存じか、見付けられては互ひの難儀。まづく奥へ」

と押し遣られ、

是非なくくも入り給ふ。

時しも襖押し開けて、館の後室萩の方、しとやかに座し給へば。

采女之助、両手を突き、

采女 「憚りながら御前様、御安泰の体を拝し、恐悦至極

仕る。して今日お召しの様子、御用いかゞ」

と伺へば、

奥口見廻し萩の方、

萩の方 「近う、近う」

と小声になり、

萩の方 「そなたも兼ねて知る通り、先祖より伝はりし獅子王の劍、何者の仕業にや、盗み取られて行き方知れず。この事禁廷へ聞こえなば、藤原の家は没収。もし

もの事があつたなら、草葉の夫へ言訳なく、とやせんかくやと自らが身につままりし今の難儀。頼りといふはそなた衆兄弟、力となつて良き様に思案を頼む、泰清」

と、世にしみじみと聞こゆれば、

采女之助、頭を下げ、

采女 「委細承知仕る。我々がためには御主人同然の道春公、いかで疎略に存すべき。天を駆けり地を潜つて隠るゝとも、草を分かつて尋ね出し、御手に入れんは案の内。お氣遣ひ遊ばすな」

と、力を付くる折こそあれ

知らせ 「皇子様より御上使」

と知らせの声、

聞いて采女はいぶかる面色、

御台は眉を皺め給ひ、

一揖し、

萩の方 「ふ、皇子様より御上使とは、姫を入内の催促ならん、自らよきに計らはん。まだ話したい事もあり、采女之助はマア奥へ」

と、仰せに

否む色目なく

采女 「しからば後刻」

と夕間暮れ、礼儀は厚き式台に、心を奥と次の間へ、立ち別れてぞ

入相時。

早や夕陽も傾きて、無常を告ぐる鐘の音もいと淋しき黄昏や、間毎を照らす銀燭の、光り目映ゆき白書院。程もあらせず入り来たる驚塚金藤次秀国、素袍の肩肘いかつげに、上座にこそは押し直る。

かくと知らせに館の後室、衣紋正しく出で迎ひ、

萩の方 「御上使様には御苦労千万、皇子様より御淀の趣、仰せ聞けられ下さりませ」

と辞讓の詞に

金藤次 「上意の次第余の儀にあらず。皇子兼々御懇望ありし獅子王の劍。今日中に差し上げるか、さなくば、娘桂姫が首討つて渡さるゝか、二つに一つの御返答。サ、只今仰せ聞けられよ」

萩の方 「ハア、こは存じがけなき御難題。その劍は紛失致し、所々方々と尋ねれども、今に於いて行き方知れず。今暫くの御容赦を」

金藤次 「ア、イヤ、そりやならぬ。皇子御心を掛けられし桂姫、度々催促あるといへども、とやかくと言ひ延ばし、打ち捨て置かるゝ事、貴族の威勢鈍きに似たりと以ての外御憤り。劍がなくなば桂姫、首にしてお渡しなされ」

と、退つ引きさせぬ釘鏝、

胸にひつしと萩の方、途方涙に暮れ給ふ。

後ろに始終桂姫、

こなたの間には初花が、忍んで様子立ち聞くととも、

知らず御台は涙を払ひ、

萩の方

「とても手詰めになる上は、いづれ逃れぬ娘が命。未練の申し事ながら、ひと通り聞いてたべ。過ぎ去り給ふ夫道春、夫婦の中に子なきを憂ひ、清水の辺なる三神の社へ立願込め、三七日の参籠。その帰るさに産子の泣き声、肌に添えしは雌龍の鉈形。由ある人の胤ならん、神の御告げと連れ帰り、育て上げしは桂姫。間もなく設けしあの初花。右と左に月花と眺め暮らせし姉妹を、是非に一人はない命、殺きにやならぬ品となる。せめて夫が在しまさば、問ひ談合もあらうもの、何を言ふても身一つにかゝる憂き目も前生の、報ひか罪か悲しや」

と、身を悔みたる御涙、留め兼ねてぞ見えけるが。

思案極めて顔を上げ、

萩の方

「杖柱とも思ふ姉妹、勝り劣りはなけれども、剣で殺さば三神への畏れといひ、ことに義理ある姉娘。こゝの道理を汲み分けて、妹の初花を代りに立てゝ給はらば、この上もなき御情け」

と、言はせも果てず声荒らげ、

ど、ハテ何とせう是非がない、サ、きりく〜とお始めなされ。ガ、勝負の付くがすぐに寂滅」

萩の方

「オ、なるほどく、それと明かさば女気の、嘆きに心掻き曇り、取り乱しては詮もなし。たゞ余所ながら暇乞ひ、ひと思ひに」

と言ひさして、詞なくく取り出だす、

用意の櫛四隅には、立つる櫛の一本も、露を待つ間や蜉蝣の、哀れ果敢なき有様を、

几帳の影に采女之助、『かゝる難儀も我れ故』と、思へど出るにも出られぬ時宜、千々に心を苦しめる、

思ひは同じ母親が、『これが冥途の使ひか』と、思へどいと急ぎ上す胸は子故の五月闇、文目も分かぬ曇り

声、

萩の方

「娘、娘」

と呼び出だす

二人「アイ」

と返事も一様に、かくとは誰も白小袖、死出の晴れ着と姉妹が、姿も対の雪柳、萎れ出でたる屠

金藤次

「ム、すりや三神の咎めは畏れ、神の御末の皇子の仰せ、御用ひはなされぬか。よし、それはともあれ、上意を受けた某に、身代りなどとは思ひも寄らず。無益の間答聞く耳持たぬ。サア只今」

と詰め寄つて、いつかな怯まぬその顔色。

叶はぬところと胸を据え、

萩の方

「イヤノウ御上使、武士はものゝ哀れを知るといふ。自らが一つの願ひはコレこの双六盤。二人の命を天道の指図に任せ、負けたる方の首を討たば、せめてはそれを定業と諦めらるゝ事もあらう。どうぞこの儀を御了簡コレ、慈悲ぢや、情けぢや、聞き分けて」

と、義理と恩愛二筋に、伝ふ涙は雨や雨、

身に降り掛かる桂姫、母の情けの有難さ、

桂姫「お慈悲」

と言ふも口籠もる、振りの袂に白雨の、晴れ間は更に見えざりき。

金藤次

「エ、様々の世迷言、見物するもまどろしけれ

所の道、羊の歩みたどく〜と、最期の座にぞ押し直る。

ひと目見るより萩の方、『さては様子を聞きしか』と、

先を取られて今さらに、とかう答へも涙なる。

母の嘆きに掻き曇る心は月の桂姫、漸うに顔を上げ、

桂姫

「委細の様子は先から、残らず聞いてをりました。峙離れし時鳥、子で子にあらぬ自らを、この年

月の御養育。まだその上に妹まで自らを助けん様々の心遣ひ、思ひ廻せば廻す程、空恐ろしい身の冥加、胸に迫つてひと言もお礼は口へは出ぬはいな。こんな憂き目を見えますも、皆自らが徒らから、とて

も叶はぬ恋故と、覚悟は極めてをりました。露塵御恩を送りもせず先立ちます不孝の罪、お許しなされて下さりませ。産みの父上母様はどこにどうしてござる

やら、命の際にたゞひと目、逢ふて死にたい顔見たい。こればかりが」

と言ひさして、声曇らせば

初花姫、

初花姫「ノウ曲もないそのお詞。たとへいづれの胤なり

とも、妾めかけのためには大事の姉様、お前は殺さぬ自ら



重之優美の御声にて、

重之「先づ頃禁廷にて歌合せの折から、息女初花姫より差し上げられし詠歌、『みさび江に、底の玉藻は乱るとも、知らるな人に深き心を』とありしを、帝叡感斜めならず、御賞美の余り女官の列に相加へ玉藻前と改めて、召し連れ来たるべしとの勅諭。ヤアく仕丁共、言ひ付けたる品早く持て」

『アツ』と答へて白台に、更衣の装束恭しく御前に差し出せば、

『ハツ』と親子は有難涙、

『辞するは恐れ』と母親が、取り取り着する五つ衣、綾羅、錦繡、緋の袴、芙蓉の顔、手弱女の辺り目映ゆきその粧ひ、

采女之助は突つ立ち上り、

采女「我れはこれより姫が首皇子の館へ持参して、虚実を以て御剣を奪ひ返して奉らん。早やおさらば」と、立ち出づる、

萩の方「コレノウ暫し」

と母親が、首に名残りの唱名はすぐに黄泉の道標、『道の案内』と驚塚が、刀を抜けばがつくりと、脆くも枯るゝ芭蕉葉の、

露の玉藻も潤ふ袖、絞り兼ねたる曦の袂、雲井の御所や九重の、大内山へと別れ行く

(2025.5.20)